

# 失いつつある日本の心

—ハーンとローエル—



ヘルン文庫

肺結核が癒えぬままに大学に入学した私は、二年間ほとんど授業に出ないで寮の部屋で横になっていた。寮のすぐそばの富山大学附属図書館にヘルン（ラフカディオ・ハーン／小泉八雲）文庫があった。私はよくそこに行き手当たり次第に八雲を読んだ。時には掃除を手伝うこともあった。そんなことから今も富山八雲会の相談役をしている。

ハーンは明治二十三年（一八九〇年）に來日しているが、来日前にパーシバル・ローエルの「極東の魂（The Soul of The Far East）」を読み、感銘し、日本に関心を持ったという。ローエルはハーンよりも七年はやく來日している。約十年滞在して多方面にわたって知的興味をもち多彩な活動をしているが、帰国後は主として天文学の研究を行っている。

ローエルには日本は地球の裏側にあつ

て、すべてにおいて西洋人の慣習の逆さを行く民族に見え、極端な家族主義、家父長制が支配していて、人々は全く没個性であり、発育不全とまで言い切っているのだ。そして、西洋文明を取り入れていかねば、やがて終焉するに違いないと断定している。

私の八雲が大好きな理由はもちろんその著作にあるが、それよりも八雲が日本に住んでみて「ローエルの日本論は恐るべき推論」だとして、自分の日本人観を変えていくところにある。個性がないのではなく、ただその色彩が違うにすぎない。没してみえる個性は日本人の天性の謙虚さであり、個を抑えて、いわゆる折り合いをつける折衷主義はむしろ積極的な日本人の特性とまでみるようになっていくのである。

彼が日本人の特性とみなしたのは、

親切、礼節、献身、信義そして少しばかりのもので満足する能力などである。

ハーンが來日してはじめての著書「日本瞥見記」の最初の文章は横浜の町にあふれる手書きの文字への印象から始めている。肉筆の文字は人々の身ぶりや表情と同じようにものをいう、その人を表すと書いているのだ。インターネット、メール：では真の心は伝わらない。だから、IT時代だからこそ肉筆の文字が重要なものではなからうか。

ハーンばかりでなく、明治初期に來日した外国人は異口同音に日本人の特性を礼賛し、日本人は世界でもっとも礼儀正しい民族といっている。日本に一時間滞在することに日本への愛着が深まっていくといっている人もある。

われわれは多くを失った、そして失いつつある。そして喪失の意識をも喪失しているのではなからうか。伝統ある「インテックファミリー」はどうであらうか。



株式会社インテック  
最高顧問

中尾 哲雄